

例年と比べて早いのか遅いのかを気にしていましたが、ようやく木々が色づいてきました。現在会員登録数 4,366 人さま。次号は 12 月 20 日発行の予定です／

＋-----◇◆◇ 目次 ◇◆◇ -----＋

【1】お知らせ

【2】コラム

《1》この本読んだ？

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

《3》子どもの本の珠玉のことば

《4》行って来ました！

《5》宮川健郎 私の出会った児童文学者たち

【3】全国のイベント紹介

【4】プレゼント

＋-----＋

■-----■
【1】お知らせ

● 講演と対談「幼年文学のはじまりと現在」 ※参加者募集中

12月8日（日） 13：00～16：00 大阪府立中央図書館 多目的室

講師：石井睦美さん（作家・翻訳家）、宮川健郎理事長

大人向け、定員 60 人、参加費 1000 円

http://www.iiclo.or.jp/03_event/02_lecture/index.html#061208

<同時開催>大阪府立中央図書館では、国際児童文学館企画展示「幼年文学のはじまりと現在」を12月28日まで開催中（IICLO協力）。

● オンライン講座「2023年に出版された子どもの本から」 ※終了間近

2023年に出版された新しい子どもの本約300冊をテーマやジャンル、年齢別に紹介し、現在の子どもの本の傾向について考えます。

配信期間：配信中～12月16日（月） 視聴料：1000円

講師：土居安子（当財団理事・総括専門員）

※詳細・申し込みは → <https://2023kodomonohon.peatix.com/>

● «ご寄付をお願いします» 当財団の運営を応援いただける個人、法人の皆さまからのご寄付を募っています。寄付金は、当財団が行う講座・講演会など、さまざまな事業経費に充てさせていただきます。

※詳細は → http://www.iiclo.or.jp/donation_10th.html

※Syncable（シンカブル）＝継続寄付（毎年／毎月）、単発寄付が選べます。

→ <https://syncable.biz/associate/19800701>

● YouTube版「本の海大冒険」 <https://www.youtube.com/@iiclol196>

※公開内容一覧は → http://www.iiclo.or.jp/ml_youtube/index.html

● Instagram https://www.instagram.com/iiclo_official/ 随時更新

● X（旧Twitter）https://twitter.com/IICLO_News 毎日更新

【2】コラム

《1》この本読んだ？ Yasuko's & Takeo's Talk

『ふみきりペンギン』 おくはらゆめ/作・絵 あかね書房 2024年10月 対象年齢：小学校中学年以上

* 今回のゲストは当財団理事長の宮川健郎さん（T）です。

あらすじ：小学3年生の「ゆうと」が、左利きをからかわれたことを気にして踏み切りの前に立っていたら、踏み切りのむこうに5羽のペンギンが見え、左手でえんぴつを持つのをからかう声が聞こえます。そのあと、「ゆうと」と姉の「さき」は、ヘビ公園で「るり」に出会います。「るり」は、「ななこ」と公園でけんかをして、一人でヘビの遊具の「なめてもらえば ねがいかなう」という言い伝えを調べていました。「ななこ」と「まいちゃん」の学校での不思議な体験をはさんで、最後は、ヘビ公園の言い伝えを調べに、子どもたちが図書館へ行きます。

T：楽しい「絵童話」だと思って読みました。「絵童話」というジャンルは確立していませんが、絵本と文学の間にあり、絵がなければ成立しない童話作品だと考えています。たとえば、いとうひろしの「おさる」シリーズ（講談社）が挙げられます。この作品も、踏み切りで「ゆうと」が「おれは、ヒラヒラに左手をのぼし、そして、にぎりしめた。」という場面がありますが、絵があることで「ヒラヒラ」とは何かがすぐわかるようになっています。著者が絵と文の両方をかいているからこそ、成立しています。

Y：「るり」が、「ななこ」に自分が描いた絵を見せて仲直りをする場面なども絵があってこそその作品だと思いました。

T：そしてそれによって、言葉が簡潔になっています。

また、構成の妙も感じました。冒頭に、「ゆうと」がからかわれたことで悩んでいます。結末に、「ゆうと」をからかった「そうすけ」が、実は「ゆうと」に「おならマン」というあだ名を付けられたことを気にしていることがわかります。そして、二人が和解するところで終わります。まるで、しりとりのような展開がおもしろいですね。

Y：「ゆうと」と「そうすけ」、「るり」と「ななこ」のように、ちょっとしたわだかまりが、溶けていくのが読んでいてうれしい気持ちになりました。そして、解決の媒介としてペンギンやヘビやライオンやフクロウなど、それぞれの子どもが不思議を見ます。

T：小学3年生の子どもならではの感じ方が書かれています。同年齢だけでなく、「ゆうと」の姉の「さき」と「るり」、図書館にこもって漢字検定の勉強をしている「そうすけ」と司書の「いなばさん」という異年齢の友だち関係も描かれています。

Y：そんな中で「ふつう」とは何かという問いかけがなされています。

T：「ななこ」と「まいちゃん」が学校の鏡で三つ編みをしたいライオンに出会いますが、そのライオンがトランスジェンダーであるなど、「ふつう」は多様な切り口で描かれています。

Y：全体としては、ヘビの遊具の「なめてもらえば ねがいかなう」という言い伝えの謎解きという筋がありますが、どの時代でもある、願いやうわさ、言い伝えのおもしろさが描かれている点が印象的でした。また、見返しに

地図があったり、「ゆうと」が見たペンギンが市のキャラクターだったりするように、公園、学校、図書館など、子どもたちがコミュニティの中に生きているというメッセージが伝わる場所もおもしろかったです。

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

第111回「二十六夜」

梟の声と汽車の音

旧暦六月二十四日の晩、北上川沿いにある獅子鼻の松林で、年老いた梟の坊さんが仲間の梟にお経を唱えていました。それは〈梟鴉守護章〉(きょうししゅごしょう)と呼ばれる梟のお経です。子どもたちは退屈のあまり遊んだり喧嘩をしたりしますが、一番小さな穂吉はおとなしく、熱心に説法を聞いていました。

翌二十五日の晩、梟たちはみんなおろおろしています。穂吉が草刈りに来た人間の子どものつかまってしまったのです。赤い糸で足を縛られた穂吉は逃げるのを諦め、お母さんは〈まるで火がついたように声をあげて泣き〉、坊さんは〈ああ可哀そうなことじゃ不愾なことじゃ〉と繰り返します。みんな穂吉のことを心配しながら、昨夜の講釈の続きを聞きます。

明けて、六月二十六日(三日目)の晩。

獅子鼻の松林に集まった梟のなかに、〈半分横になって、じっと目をつぶって〉る穂吉の姿がありました。穂吉は人間の子どもの足に折られ、放り出されたのです。梟たちは怒り、人間への仕返しを口にしますが、坊さんは〈仇を返したいはもちろんの事ながら、それでは血で血を洗うのじゃ。こなたの胸が霽れるときは、かなたの心は燃えるのじゃ。いつかはまたもっと手ひどく仇を受けるじゃ、この身終って次の生まで、その妄執は絶えぬのじゃ。遂には共に修羅に入り闘争しばらくもひまはないのじゃ。必らずともにさようのたくみはならぬぞや。〉と教え諭します。

その後、〈二十六夜の金いろの鎌の形のお月さま〉が空に昇ります。月からは紫色の煙が出、煙は雲を作り、その雲の上に〈金いろの立派な人が三人まっすぐに〉並び立ちます。みんなは〈南無疾翔大力〉と高く叫び、その菩薩の〈かがやく左手がこっちへ招くように伸びたと思うと〉、穂吉は〈冷たくなって少し口をあき、かすかにわらったまま、息がなくなっていました〉。

難解な説法が繰り返されますが、お坊さんの講釈は大衆に説き伏せるようにわかりやすく語られます。一方、兄弟のなかで最も幼く従順で、退屈なお経も熱心に聴く穂吉が人間の子に足を折られ、やがては死に至る結末は、宗教色が強い作品とはいえ、厳しいものです。

ところで、物語のなかに流れているのは、実に対照的な「音」です。ゴホゴホと唱えられる老梟の説法の声。他方、松林や梟の世界にたびたび混入してくるのは、人間が造り出した近代的な汽車の音。〈お経の声と汽車の音の対比を通して本作の特質を捉えることも可能〉とも言われますが(小埜裕二「二十六夜」平成十五年)、この対照的な音は、両者が決して交わることを示しつつ、同時に双方が常に隣り合わせに在ることを思い知らせます。汽車の音を間近に感じながら生きる梟にとって、人間は不条理な死をもたらす存在です。

穂吉の昇天を描いたあと、〈そして汽車の音がまた聞えて来ました。〉と語って物語は閉じられます。汽車は、不条理な人間を暗示するとともに、銀河鉄道のごとく、死者を旅立たせるものなのかもしれません。穂吉のかすかな笑いは、よだかや小十郎とも通じる〈離苦解脱〉への歩みを示しているようです。
(ペ吉)

(本文の引用は、新潮文庫版『新編 風の又三郎』によりました。)

《3》子どもの本の珠玉のことば 65

いやになっちゃう いやになっちゃう
あたしは こんなに おしゃれなこなのに
あたしの なまえは おしゃれじゃないの
いったい あたしは どうすればいいの
ああ でもきっと どうにもならない
ぜつぼうだ

(「あたしはすみれ」『すみれちゃん』 石井睦美/作 黒井健/絵 偕成社
2005年12月 p.8)

すみれちゃんは、自分の名前が「おしゃれじゃない」と思って引用のような歌を歌います。パパが驚いて「ぜつぼうってなにかしてるのか？」と聞くと、「ぜつのぼう」という棒だと説明します。そして、すみれちゃんは、「フローレンスっていうなまえになるべきだった」と言うのです。フローレンスは、おばあちゃんにもらった、『フェアリー』という絵本の花の妖精のことだと言います。パパはすみれちゃんに「すみれ」という名前の由来を説明し、植物図鑑を見せてくれます。すみれちゃんは図鑑の写真を見て、フローレンスにそっくりだと喜び、パパがすみれの花のことを「エレガントだ」というと、また歌を作ります。

こんなふうに、すみれちゃんは、自分の周りにアンテナをいっぱいはりめぐらせて、周りのできごとやことばを自分なりに理解し、自分らしくあるために前向きにつき進んでいきます。自己肯定感の高さから両親に愛されてすくすく育っている様子が読み取れます。パパとのちぐはぐな会話はユーモラスで、すみれちゃんにはすみれちゃんのものの見方や考え方があることがわかり、それをパパが尊重しているところに共感します。

本書は全6話で、かりんちゃんという妹が生まれます。すみれちゃんが「ママっ、たいへん。かりんちゃん、歯がないの。」には思わず笑ってしまいました。
(Y)

《4》 行って来ました！

市立伊丹ミュージアムで12月22日まで開催されている「伊藤潤二展 誘惑」に行ってきました。伊藤潤二は、1963年に岐阜県中津川市で生まれた漫画家で、「月刊ハロウィン」(朝日ソノラマ)新人漫画賞「楳図賞」の創設をきっかけに、楳図かずお氏に読んでもらいたい一念で投稿し、1986年、投稿作『富

江』で佳作受賞。この作品がデビュー作となり、代表作になります。1998年から「週刊ビッグコミックスピリッツ」(小学館)で『うずまき』の連載を開始し、その後も『ギョ』や『潰談』などを発表しています(参考:本展覧会HP)。自筆原画、ネーム、イラスト、絵画、フィギュアなど600点以上が「美醜」「日常に潜む恐怖」「世界」の3章で構成され、展示されていました。

ポスターを見ると「怖い」イメージが先行して、楽しめるだろうか心配しながら展示を見ましたが、原画は線が緻密で美しく、不思議と怖さを感じませんでした。特に、女性が上品で美しく、楀図かずお「洗礼」を思い出しました。

何度でもよみがえる美女「富江」や、顔や体の一部が変化してうずまきになる「うずまき」など、その変化のありようが多様で、繰り返し見ていくうちに、怖さとともに笑いもこみあげてきました。また、作品に添えられている、お話の発想やキャラクターについての伊藤潤二の解説が興味深く、時に批評性があったり、自虐的であったりして作品を二重に楽しむことができました。

自分の写真を撮影して、それが「うずまき」に変化していくのが映像として見られるコーナーもあり、何度も試してしまいました。ホラーって何だろう。なぜ、人は怖いものが見たいのだろうなどと、考えながら展示を見ました。未読の漫画も多くあったのでこれから読んでみたいと思いました(K)。

市立伊丹ミュージアム <https://itami-im.jp/>

《5》 宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第15回

第5章 古田足日先生

その1 『現代児童文学論』

ことは、古田足日・田畑精一の絵本『おいしいのぼうけん』(童心社1974年)の刊行50周年にあたります。私が古田足日先生(1927~2014年)に出会ったのは、『おいしいのぼうけん』が刊行された、つぎの年。私は19歳でした。

この連載では、「思い出話」を語るだけではなく、私の出会った児童文学作家や評論家の仕事に対する考察や、さらには、そこから、現代児童文学史のとらえ直しも試みます。ご愛読ください。

<本編はこちらから>

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/watashinodeatta.html

■-----■

【3】全国のイベント紹介

■-----■

●「中辻悦子展 Where are you from? どこからきたの」

会期:開催中~11月30日(土) 11:00~19:00 ※休廊日あり

場所:Yoshiaki Inoue Gallery(大阪市)

上記イベントの詳細およびその他の講座・講演会、展示会、公募情報については、こちらからご覧ください。↓↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/04_other/index.html

※イベント情報をお送りください。当財団HPに掲載させていただきます／

■ ----- ■
【4】プレゼント
■ ----- ■

今号のコラム《1》「この本読んだ？」で紹介しました『ふみきりペンギン』をプレゼントします。ご希望の方は、プレゼント応募フォームから、(1)お名前 (2)郵便番号・住所 (3)電話番号 (4)メールアドレス、よろしければ (5)このメルマガのご感想をお書きのうえ ご応募ください。

応募フォーム⇒ <https://forms.gle/uL2TpNhMEYWJpnQ9A>

締切は12月10日(火)、当選発表は発送をもって代えさせていただきます／

編 | 集 | 長 | の | つ | ぶ | や | き |

「大阪商業大学商業史博物館」に行ってきました。学芸員さんの説明を聞きながら、江戸時代の商都大阪の繁栄や河内木綿にまつわる史料を見せていただきました。さまざまな文化を将来に伝えていく活動は、当財団とも通じるものがあります。新たな発見もあり、大いに楽しめました。(TA)

みなさまのご意見・ご感想をお聞かせください。下記メールアドレスまでお願いします。

原則として返信はいたしませんのでご了承ください。

●このメールマガジンは、ご登録いただきました皆様に配信しています。

●配信の登録・解除・変更は、

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/index.html

●このメールの送信アドレスは配信専用です。

●記事の無断転載はご遠慮ください。

発行：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団 <http://www.iiclo.or.jp/>

〒577-0011 大阪府東大阪市荒本北 1-2-1 大阪府立中央図書館内

TEL：06-6744-0581 FAX：06-6744-0582 E-mail：office@iiclo.or.jp
